

ヒンディー語母語話者による日本語名詞句構造に関
わる「の」の習得過程：
被験者Mの来日後5ヶ月間の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006612

ヒンディー語母語話者による日本語名詞句構造に関わる「の」の習得過程

—被験者 M の来日後 5 ヶ月間の事例—

久野 美津子

【要旨】

ヒンディー語を母語とするインド人女性の来日後 5 ヶ月間 (4 ~ 21 週目) の発話データを基に、名詞句構造に関わる「の」の習得過程について調査した。その結果、主に次の特徴が見られた。(a) 「の」の脱落が 4 週目から観察され、21 週目まで続いた。特に 4 週目は脱落の割合が高く、L1 転移の影響では説明し難い脱落も多く見られた。(b) 適格な「の」も 4 週目に観察され始めたが、「の」の出現後も脱落は消失せず、適格構造と脱落とが混在していた。(c) 「は」「を」「に」「と」「で」による代用の誤りが観察された。中でも「は」の使用回数は比較的多く、そのほとんどが早期に観察されていた。(d) 発話の際、一旦「の」を脱落したり他の助詞で代用したりするものの、すぐに言い直す例が多く見られた。以上の特徴のうち (a) ~ (c) は先行研究でも類似した報告があることから、L2 学習者の「の」の習得には基本的に類似した習得過程があるのではないかと予想された。

【キーワード】名詞句構造、習得過程、ヒンディー語母語話者、格助詞「の」、脱落の誤り

1. はじめに

第二言語 (L2) として日本語の格助詞を習得する学習者は、その過程で脱落の誤りをすることが知られており、名詞句構造に関わる「の」についても脱落が報告されている (迫田 1990、松田・斎藤 1992、白畑 1994、久野 2004、白畑・久野 2005、久野 2009)。このうち、白畑・久野 (2005) では、名詞句構造内での「の」の発達段階について、最初期には「の」を脱落する段階があり、その後「の」を付与するようになる段階があると述べている。このように、脱落を分析対象に含めた「の」の習得研究はいくつかある。しかし、成人学習者を被験者とした縦断的研究に限ってみると、その数はあまり多くないと思われる。久野 (2009) は、これまでほとんど報告のない成人のヒンディー語母語話者 1 名について、5 ヶ月間の発話データを基に名詞句構造について調査した。その結果、習得の最初期から、適格構造と共に脱落や代用の誤りも観察されることが確認できた。しかし、観察期間を通じて発話量が少なく、信憑性に欠けるものとなっている。そこで、本稿では、新たにヒンディー語を母語 (L1) とする学習者 1 名から得た来日直後の発話データを基に、名詞句構造における「の」について使用状況を調査したい。特に、データを 1 週間ごとに記し、発話例をできるだけ多く記述することによって、習得過程の最初期の様子を明らかにしたい。

2. L2 先行研究

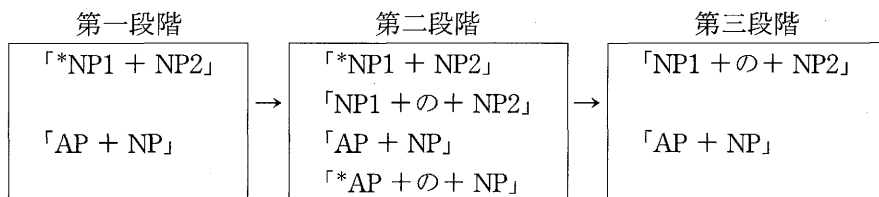
2. 1 児童を対象とした先行研究

名詞句構造に関わる「の」の習得研究のうち、脱落の誤りも視野に入れ、長期間にわたっ

て児童を縦断的に調査したものに白畑・久野 (2005) がある。被験者は中国語を L1 とする児童 1 名 (A 児)、英語を L1 とする児童 2 名 (B 児、C 児) の計 3 名である。来日年齢は 8 ～ 11 歳、データ収集期間は A 児が滞在 2 ～ 26 ヶ月目、B 児が滞在 1 ～ 14 ヶ月目、C 児が滞在 1 ～ 21 ヶ月目である。彼らの発話データを基に、「Noun Phrase (NP) 1 + の + NP2」構造および「Adjective Phrase (AP) + NP」構造について、誤りも含めたデータを分析した。その結果、彼らに共通する主な特徴が 3 つ見られた。1 つ目は、「NP1 + の + NP2」構造に関して、滞在 1 ～ 2 ヶ月目から「*NP1 + NP2」という「の」の脱落 (例: *わたしともだち) が、「NP1 + の + NP2」よりも先か、または遅くとも同時期に観察されたことである¹⁾。そして、この「*NP1 + NP2」と「NP1 + の + NP2」は長期間 (10 ～ 20 ヶ月間) にわたって混在していた。2 つ目の特徴は、「NP1 + の + NP2」構造で代用の誤りが観察されたことである。特に「は」による代用 (例: *わたしはおとうさん) は 3 名共に観察され、その出現時期は比較的早期であった。3 つ目の特徴は、「AP + NP」構造に関して、最初期には「AP + NP」のみが観察され、その後「*AP + の + NP」が「AP + NP」と共に一定期間観察されるが、最終的には適格構造のみが発話されるという習得過程をたどったことである。

これらの結果を基に、白畑・久野 (2005) では名詞句構造に関わる「の」の発達段階を (1) のように提示した。「第一段階」は「の」の出現がなく「*NP1 + NP2」や「AP + NP」が現れる段階である。「第二段階」は「の」の付与規則を次第に認識し「NP1 + の + NP2」が出現し始めるが、修飾要素である語彙の素性の習得が不完全なため、依然として「の」を脱落したり、逆に「AP + NP」に「の」を過剰に適用したりする²⁾。「の」の付与規則の習得期間は学習者の L1 の特性の相違によって左右され、その差が「第二段階」に留まる期間の違いとなって反映される。「第三段階」は関連する規則の習得が確実なものとなり、「*NP1 + NP2」や「*AP + の + NP」が消失し、適格構造だけが適用される段階である。

(1) 名詞句構造に関わる「の」の発達段階



2. 2 成人を対象とした先行研究

成人学習者を対象に、脱落も含めて分析している縦断的調査には、松田・斎藤 (1992)、白畑 (1994)、久野 (2009) などがある。松田・斎藤 (1992) では、韓国語を L1 とする女性 2 名 (K と A) から得た 6 ヶ月間の発話データ 16 回分を基に格助詞の習得研究を行い、その 1 つとして「の」の使用状況を記している。調査開始時期は被験者が来日してから 1 ～ 2 ヶ月後である。データは 8 回分ずつ前半と後半にまとめられている。それによれば、「の」の脱落の割合は K の場合、前半が 33.78% (使用数は 148 回中 50 回)、後半が 45.04% (131 回中 59 回) であり、A の場合、前半が 66.04% (53 回中 35 回)、後半が 34.64% (127 回中 44 回) である。誤りには脱落のほか、割合は少ないが「へ」「を」「に」「は」による代用も

観察されている。これらのデータからは、成人学習者の場合も高い割合で「の」を脱落することがわかる。ただし、データがまとめて記されていることや、脱落に関する発話例の記載がないことなどから、習得の最初期の様子について詳しく知ることは難しいと思われる。

白畑 (1994) はタイ語を L1 とする女性 (S1) とマレー語を L1 とする男性 (S2) の 18 ヶ月間に得られた発話データを基に、名詞、形容詞、動詞を修飾要素とする連体修飾構造の習得過程について、誤りに焦点を当てながら調査した。データは 2 ヶ月間を 1 期間とし、9 期間に区分し示されている。このうち「NP1 + の + NP2」構造では、両者共に第 1 期から適格な「の」が発話され、同時に脱落も観察されていた。L1 で「の」に相当する語が必要な S1 の場合、脱落の回数は少なかった。これに対し、L1 で「の」に相当する語を必要としない S2 の場合、脱落の回数は多く、また、全期間を通じて観察されていた。その理由として、L1 転移の影響が示唆されている。このように、白畑 (1994) の報告からは、成人学習者の場合にも「の」の脱落が早期から観察されることや、適格な「の」が使用されるようになって脱落が混在していることなどがわかる。ただし、データが 2 ヶ月ごとにまとめて報告されているため、長期間にわたる習得過程の推移を把握することはできるものの、最初期の様子について詳しく知ることは難しいと思われる。

久野 (2009) は、ヒンディー語を L1 とするインド人留学生 1 名 (S、30 代男性) の来日後 3 ~ 19 週目 (滞在 1 ~ 5 ヶ月目) の発話データ 12 回分を基に、名詞句構造の発話状況を調査した。その結果、「NP1 + の + NP2」構造の場合、滞在 4 週目に、適格構造だけでなく脱落や「は」による代用の誤りも同時に観察され始め、これらは 5 週目以降も断続的に観察されていた。脱落については、L1 からの転移で説明できないものもあった (例: *わたしともだち)。代用の助詞には「は」が合計 4 回観察されたほか、「を」も 1 回観察された (例: *わたしはうち、*エスカレーターをちかく)。誤りにはこの他に「*NP2 + NP1」などもあった (例: *まえザザシティ)。一方、「AP + NP」構造の場合、発話回数が少なく、滞在 8 週目にナ形容詞を用いた発話が 3 回、16 週目にイ形容詞を用いた発話が 3 回観察されただけであった。このうち、ナ形容詞の発話では、「きれいな」とすべき箇所を「きれい」とした誤りが観察された (例: *きれいプレイス)。

久野 (2009) では S の特徴を白畑・久野 (2005) の児童の特徴と比較した。その結果、「NP1 + の + NP2」構造の場合、脱落が早期から観察された点、適格構造と脱落とが数ヶ月間混在していた点、他の助詞による代用が観察された点で類似点が見られた。一方、「AP + NP」構造の場合、最初期に「AP + NP」のみが観察された点では類似していたが、S に「の」の過剰使用が観察されなかった点で異なっていた。以上の点を踏まえ、久野 (2009) は S の名詞句構造の発達段階について、白畑・久野 (2005) の提示する発達段階のうち「第二段階」の状態であった可能性を述べている。その「第二段階」は「第一段階」に非常に近いものであり、また「*AP + の + NP」が出現する前の状態であると考えられた。

久野 (2009) の調査には課題も残っている。それは、被験者が S1 名である点、さらに、発話データの量が非常に少なかったため、S に見られた特徴が S 特有のものなのか、あるいは、他の成人学習者にも見られるものなのか不明だという点である。これらの課題を解決するため、本稿では、S と同じくヒンディー語を L1 とする成人学習者のデータを基に、「の」

の使用状況について特徴を述べ、その特徴をSの場合と比較しながら、習得過程について考察したい。

3. 調査

3. 1 データ収集方法

被験者はヒンディー語をL1とするインド人留学生 (M, 20代女性) 1名である。2010年4月5日に来日した。来日前に日本語の学習経験はなかった。Mは来日後4日目から初級クラスで日本語を学習し始めた。日本語のクラスは週に3回程度であった。Mは大学院の授業等で特に日本語が必要というわけではなく、普段は主に英語を用いて生活していた。データの収集期間は来日後4～21週目(滞在1～5ヶ月目)である。データ収集方法は、Mと観察者(筆者)が1週間に1度、約1時間の自由会話をし、録音したものを後に文字化した。データ収集の回数は合計18回、合計時間は約18時間である。

分析対象としたのは名詞を修飾要素とする名詞句構造である⁽³⁾。適格な発話だけでなく、脱落や代用の誤りも含めて調査した。ただし、観察者の発言を単に繰り返したものや、書かれた文字を読んだものなどは対象外とした。同構造は初級クラスで比較的早期に導入される文法項目であり、Mの場合、調査開始前(滞在1週目)に導入され、その後の授業でも折に触れて文法説明や練習などが行われていた。

表記に関して、構造形式と実際の発話例とを区別するため、以下では便宜的に、構造は「NP1 + の + NP2」構造のように、発話例は「N1 の N2」(例:わたしの本)や「*N1 φ N2」(例:*わたし本)のように記す。「φ」は「の」の脱落を表す。また、久野(2009)では、名詞が2つから成る名詞句(例:私の兄)と3つから成る名詞句(例:私の兄の本)とを特に区別しなかったが、本稿では使用状況をより詳細に記述するため、前者は「NP1 + の + NP2」、後者は「NP1 + の + NP2 + の + NP3」と区別して記すことにする。

3. 2 ヒンディー語の名詞句構造

被験者のL1であるヒンディー語の名詞句構造(名詞を修飾要素とする場合)について簡単に記し、日本語の表現と比較したい。「の」に相当するヒンディー語には後置詞 *kā* (または *ke*, *kī*) があり、語順は日本語と同じである(「NP1 + *kā* + NP2」)⁽⁴⁾。例えば「あなたの息子」は「*aap* (あなた) + *kā* (の) + *beta* (息子)」のように表現する。古賀・高橋(2006)によれば、*kā* には多くの用法があり、所属や帰属の関係(例:彼の弟)、動作・作用の主体(例:彼の死)、ある性質や状態の主体(例:睡眠の不足)、動作・作用の場所や方向・対象・範囲(例:インドへの旅行)、材料(例:木の箱)などを表すことができる。*kā*, *ke*, *kī* の使い分けは、被修飾要素である名詞(NP2)の性、数、格(格を明示する後置詞を伴う「斜格形」、後置詞を伴わない「直格形」)の違いによって決まる。(2)は直格形の場合の用例である。(2a)は*kā* (NP2が男性名詞で単数)の例、(2b)は*ke* (NP2が男性名詞で複数)の例、(2c)(2d)は*kī* (NP2が女性名詞で単数または複数)の例である。

- (2) a. *aap* *kā* *beta*
 あなた の (1人の) 息子

- b. aap ke bete
 あなた の 息子達
- c. aap ki betī
 あなた の (1人の) 娘
- d. aap ki betiyā
 あなた の 娘達

また、人称代名詞の場合、「NP1 + kā」に相当する表現を1語で表せる属格がある。例えば、maī (私は) は merā (私の) に、ham (私達は) は hamārā (私達の) になり、その語尾は kā の場合と同様、NP2 の性・数・格に応じて変化する。(例: merā beta 私の息子、merī betī 私の娘)。

ただし、「NP1 + の + NP2」が全て「NP1 + kā + NP2」に対応しているわけではなく、「NP1 + の」に相当する表現がヒンディー語の形容詞や副詞で表せる場合などは、kā は必要ない。例えば国名を含む表現の場合、bhartiyā (インドの) と nārī (女性の) で bhartiya nārī (インドの女性) と表現できる。数量を表す場合は、tīn (3) と dost (友達) で tīn dost (3人の友達)、時を表す場合は、kal (明日) と shām (晩) で kal shām (明日の晩) などと表現することができる。

以上の点を踏まえ、ヒンディー語をL1とする学習者のL1転移の可能性について考えた。ヒンディー語で名詞句構造を表すには、多くの場合、kāが必要であり、さらにkāはNP2の性・数・格によってkeやkiに変化させる必要がある。そのため、ヒンディー語では、名詞句構造を表す形式が複数あると言えるだろう。一方、日本語ではNP2の性・数・格に関係なく、「の」という1つの形式によって表すことができる。このことから、ヒンディー語母語話者にとって、日本語の「NP1 + の + NP2」構造の習得はそれほど困難ではないだろうと予想される。そして、習得の最初期の段階から「の」が適格に付与され、発話される可能性が高いと考えられる。仮に、L1で「NP1 + kā + NP2」と表現できる名詞句について、日本語の「の」を脱落した場合には、L1転移の影響とは考えがたい。ただし、上述したように、ヒンディー語にはkāを用いない名詞句の表現もあり、そのような名詞句において脱落が観察された場合には、L1転移の影響の可能性も否定できないと思われる。

4. 結果と考察

4. 1 調査結果

調査の結果、観察を開始した4週目に適格な「の」が観察され始めた。それと同時に、脱落や他の助詞による代用の誤りも観察された。表1にはMの発話状況を記した。

誤りには様々なパターンがあり、脱落には「*N1 φ N2」「*N1 φ N2 φ N3」「*N1 の N2 φ N3」「*N1 φ N2 の N3」が、代用には「*N1 は N2」「*N1 は N2 の N3」「*N1 を N2」「*N1 と N2」「*N1 で N2」「*N1 に N2」「*N1 に N2 の N3」「*N1 の N2 に N3」があった。この他、「*N1 φ N2 の」(例:*わたし かばんの) や「*N1 は N2 の」(例:*わたしはかぞくの) も観察された。また、「*わたしは のほん」のように、まず「は」を発話し、途中で「の」に言い換える例などもあったが、これは代用の誤りとみなした⁵⁾。

表1 被験者Mの名詞句構造の調査結果

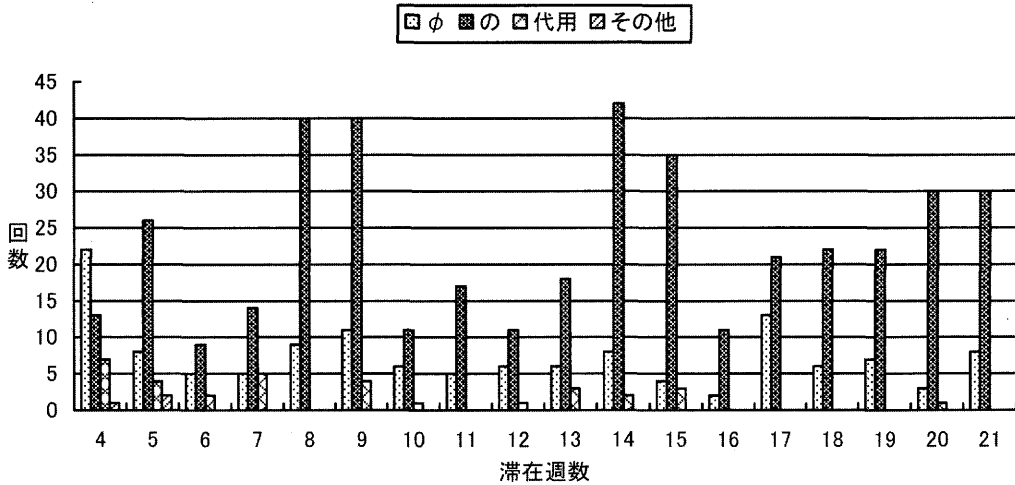
形式\週	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
*N1φN2	21	6	5	5	8	9	6	4	7	4	7	1	1	12	5	4	2	5
N1のN2	13	25	8	12	37	38	9	16	11	12	38	26	10	20	21	17	23	23
*N1はN2	4	—	2	2	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
*N1をN2	3	1	—	—	—	1	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
*N1φN2の	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*N1はN2の	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*N1とN2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*N1でN2	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*N1にN2	—	—	—	—	—	2	—	—	1	3	—	2	—	—	—	—	1	—
*N1φN2φN3	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*N1はN2のN3	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
*N1にN2のN3	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
N1のN2のN3	—	—	—	—	1	—	1	—	—	2	1	3	—	—	—	1	3	2
*N1のN2φN3	—	—	—	—	1	2	—	1	—	1	1	3	1	1	1	3	1	3
*N1φN2のN3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
*N1のN2にN3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—

表1の結果を基に「の」「φ」「代用」等の回数を週ごとにまとめたものが表2である。例えば「*N1のN2φN3」(例:*わたしのにほんともだち)の場合、「の」が1回、「φ」が1回として数えた。表内の数字は、上段が回数、下段が割合(%)である。

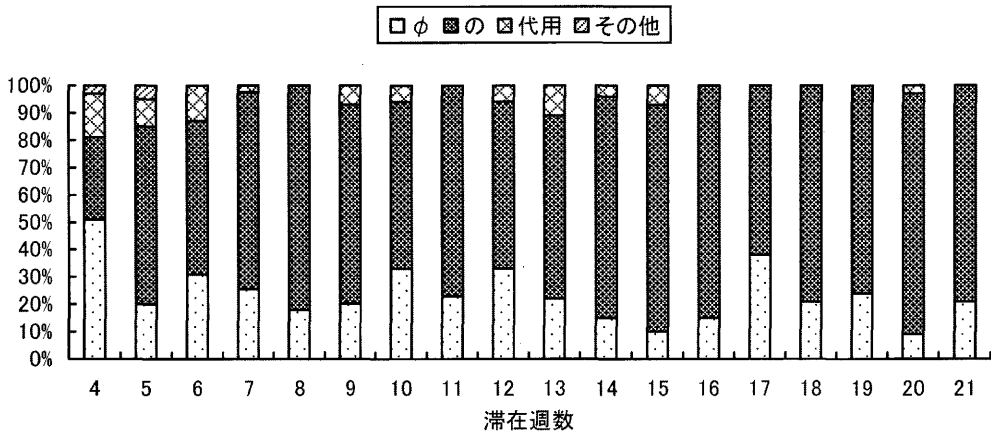
表2 名詞句構造内の「φ」「の」「代用」等の回数と割合(%)

項目\週	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
「φ」	22	8	5	5	9	11	6	5	7	6	8	4	2	13	6	7	3	8
	51	20	31	21	18	20	33	23	37	22	15	10	15	38	21	24	9	21
「の」	13	26	9	14	40	40	11	17	11	18	42	35	11	21	22	22	30	30
	30	65	56	59	82	72	61	77	58	67	81	83	85	62	79	76	88	79
代用「は」	4	3	2	2	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
	9	8	13	8							2							
代用「を」	3	1	—	—	—	1	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
	7	2				2	6					2						
代用「に」	—	—	—	2	—	2	—	—	1	3	1	2	—	—	—	—	1	—
				8		3			5	11	2	5					3	
代用「と」	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
				4														
代用「で」	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
						2												
その他	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	3	5																
回数計	43	40	16	24	49	55	18	22	19	27	52	42	13	34	28	29	34	38

また、この表2を基に、「 ϕ 」「の」「代用」「その他」の週ごとの回数を示したものがグラフ1であり、割合(%)を示したものがグラフ2である。



グラフ1 「 ϕ 」「の」「代用」「その他」の回数



グラフ2 「 ϕ 」「の」「代用」「その他」の割合

以上の結果から、Mに見られた主な特徴について述べる。まず1つ目は、「の」の脱落が早期から観察されたという点である。名詞句構造に関する基本的な文法的説明は日本語クラスで導入されており(例:静岡大学の学生、私の本、車の雑誌)、Mには同構造に関する基礎的知識が多少なりともあったであろうと思われる。それにもかかわらず、「の」の脱落が観察されたことになる。脱落の割合は観察を開始した4週目が最も高く、発話全体の51%を占めていた。

2つ目の特徴は、代用として用いられた助詞のうち「は」の発話回数が比較的多く(12回)、

しかも、そのほとんど(12回中11回)が4~7週目の早期に観察されていたという点である。代用には他にも「を」(7回)や「に」(12回)などが観察されていたが、これらは期間を通じて断続的に観察されており、「は」の観察された時期とは異なっていた。

3つ目の特徴は、名詞が3つから成る「NP1 + の + NP2 + の + NP3」が、「NP1 + の + NP2」ほど多くはないものの、断続的に観察された点である。「NP1 + の + NP2 + の + NP3」は5週目に観察され始めたが、5~7週目は脱落や代用など不適格構造のみの発話であった。その後、8週目以降になって適格構造が観察されるようになった。

4つ目の特徴は、発話時の様子に関することであるが、一旦、「の」を脱落したり、あるいは、他の助詞を用いて発話したりするものの、すぐに「の」を用いて言い直す例が多く見られたという点である。

以下では、実際の発話例を記しながら、使用状況を詳しく見ていきたい。

4. 2 発話例

4. 2. 1 脱落の発話例

まず、脱落の発話例について見ていく。脱落が観察された名詞句を見ると、国名(または言語名)や数量に関する語彙を修飾要素とする名詞句が多かった。その割合は国名が32%(135回中44回)、数量が30%(135回中40回)であった。また、時に関する語彙を修飾要素とする場合の名詞句は、脱落全体に占める割合は高くないものの(135回中9回)、観察された時期が他の名詞句に比べて遅いという傾向があった。そこで、これらの特徴を考慮し、修飾要素の語彙を便宜的に「国名等」「数量等」「時」「その他」の4つに分類して、脱落の例を記すことにした。表3は、週ごとの発話例と発話回数(「φ」の回数)を分類別に記したものである。紙面の都合上、発話例には漢字も用いた。

表3 修飾要素別に見た脱落の発話例と発話回数

週数	国名等	数量等	時	その他
4	日本語 本 インド人 先生 (5)			パソコン 雑誌 先生 かばん (17)
5	日本語 本 タイランド本 (7)			松本 うち (1)
6	インド語 本 日本語 劇 (2)	一人 友達 (3)		
7	インド 下 インド マップ (2)	二人 ひと (2)		彼 ホームタウン (1)
8	インド 果物 モンゴル 歌 (3)	いち フェスティバル 二人 ウーマン (2)		村 ひと 車 パトロール (4)
9	デリー 地図 インド サリー (3)	いち 場所 全部 湖 (3)		大学 写真 わたし 友達 (5)
10	インド 電話 日本語 茶 (5)			クラス あとで (1)
11	インド 大学 日本語 音楽 (4)			コンピュータ 会社 (1)
12		たくさん 学生 ふたつ カレッジ (6)		病気 ひと (1)
13	私のインド フォーン (1)	全部 インドじん 全部 人のダンス (2)	昨日 晩 (2)	祭り ペリオド (1)
14		インドの全部 文化 たくさん 友達 (4)		木 うえに 水 ちかく (4)
15	私のインド 友達 私のインド 先生 (2)		昨日 朝に (1)	日本のパソコン 会社 (1)
16			今日 朝 (1)	私の先生 名前 (1)
17	私のインド 先生 インド 歌 (2)	二台 バス たくさん 人 (7)	昨日 晩に 今日 朝に (3)	私達 ペアレンツ (1)
18	日本語 グラマー (1)	二人 女の人 全部 女の人 (5)		
19	先生の日本 友達 私の中国 友達 (4)	二人 子供の 一人 友達 (2)		ゴールデンシャワー下に (1)
20	私のインド 先生 (1)	さん 山 (1)		茶道 カップ (1)
21	私のインド 先生 (2)	私のたくさん 友達 ひとつ 部屋 (3)	昨日 晩に 今日 晩に (2)	プレゼンテーション あと (1)
計	44 回	40 回	9 回	42 回

以下では、実際の脱落の発話例を修飾要素別に、適格な例も交えながらいくつか記す⁶⁾。発話例の表記について、会話形式での発話者 R は観察者を示す。例中の () 内の語は筆者が補ったものである。〈 〉には発話時の状況を記した。発話例最後の () 内の数字は観察時の週数である。本稿で分析対象とした名詞句には全て網がけをした。

まず、(3) は「国名等」を修飾要素とする名詞句の発話例である。例えば、(3a)「にほんごのほん」と(3b)「*にほんご(の)ほん」、(3e)「*インドご(の)ほん」と(3f)「インドのほん」、(3g)「*にほんご(の)げき」と(3h)「にほんごのげき」のように、同じ物について表現しているにも関わらず、適格な「の」と脱落とが同時期に観察されることがあった。

これらの例からは、「の」の使用が定着していない様子がうかがえる。また、(3m)「*にほんじん (の) ライス」は「日本の」とすべき箇所を「にほんじん」と発話している例である。

(3) 「国名等」を修飾要素とする発話例

- a. にほんごのほん、にほんごのほん、です。(4)
- b. R: これは何の本ですか?
M: *これは にほんご、にほんごー (の) ほんです。(4)
- c. *これはにほんご (の) きょうと (の) ほんです。(5)
- d. *インド インドじん (の) せんせい。(5)
- e. *これは インド、インドご (の) ほんですか。(6)
- f. これは ヒンド インド の ほんですか、ほんです。(6)
- g. *かいかんの テレビで にほんご (の) げき、げき (を) みました、みます。(6)
- h. わたしは にほんごの げきを ならいています。(6)
- i. *わたしはインド (の) うたをうたいました。*Uさん (は) モンゴル (の) うた (を) うたいました。(8)
- j. *わたしたち デリー (の) ちず、モデル を つかれ、つくれました、つくりました。(9)
- k. *これはインド (の) けいたいです。(10)
- l. *インドの、にほんごも、にほんご (の) おんがくも ききます。(11)
- m. わたしは せんげつ タイのごはん (を) かいました。すきじゃないです。*にほんじん (の) ライス ベター。(11)
- n. *わたしのインドのせんせい、せんせいの にほん (の) ともだち、にほんのともだち (は) ティーカップ (の) プレゼント (を) あげました、くれました。(19)
- o. *わたしのインド (の) せんせいは せんせいも いきたい。(21)

このように「国名等」を含む名詞句で脱落が多く見られた一因には、ヒンディー語（あるいはMのよく使用する英語）の転移の影響もあるかもしれない。例えば「日本語の本」はkiを用いて「jāpānī (日本の) bhāṣā (言語) kī (の) kitāb (本)」と表現することも可能である。しかし、kiを用いず「jāpānī (日本の、日本語、日本人、等)」と「kitāb (本)」を用いて「jāpānī kitāb (日本の/日本語の本)」と表現することもできる。そのため、これら

の脱落には、L1 転移の影響が少なからずあるのではないと思われる。

次に、「数量等」の語彙を含む発話例は(4)のとおりである。これらは6週目以降に観察されるようになったが、6～13週目の発話例は全て「の」が脱落していた。14週目になって初めて、(4e)「たくさんのひと」のように「の」が観察されるようになった。

(4) 「数量等」を修飾要素とする発話例

- a. *こうえんに ベンチの うえに ふたり (の) ひと (が) あります、います。(7)
- b. *デリーの みずうみ、ぜんぶ (の) みずうみ、きれいです、きれいじゃないです。(9)
- c. *たくさん (の) ほんは たくさん (の) ほんに あります。*たくさん (の) ひとに、ひとは ざっと ほんは かいます、かきます、no かき、よみます。(12)
- d. *ラームのともだち、たくさん (の) ともだちと ランカをいきました。(14)
- e. これはこうえんです。たくさんのひと (が) います。(14)
- f. ぜんぶのひとは ハッピーです。(14)
- g. 〈異カースト間の結婚について〉すこしのひとは だいじょうぶです。*たくさん (の) ひと (は) できません。(17)
- h. *パーティーに、ぜんぶ (の) おんな おんなのひとは invited。(18)
- i. 〈インドの3つの山の話〉*さん (の) やま さんのやま (が) あります。そこ やまは おてら やまに おてら (が) あります。たくさんのひとは まいにち のぼります。(20)
- j. *わたしのたくさん (の) ともだち、ここにいきました。(21)

次に、「時」を修飾要素とする発話例は(5)のとおりである。これらが最初に観察された時期は、適格構造が12週目、脱落が13週目であった。発話回数は適格構造を含めて15回であり、そのうち9回で脱落が見られた。

(5) 「時」を修飾要素とする発話例

- a. にちようびの ばんごう、ねません。(12)
- b. *きのう (の) ばんに Rさん (は) おしえました。(13)
- c. *きのう (の) あさに くすりをのみました。(15)

- d. わたしは にちようび、にちようびの あさに たべる。(15)
- e. *きのう (の) ばんに わたしと Nさんと わたしのインド (の) せんせい (は) いっしょにりょうりを インドりょうりを つくりました。(17)
- f. *だから、きょう (の) あさに わたしはごはんを フライドライス つくりました。(17)
- g. らいしゅうの げつようび わたしのはっぴょう (が) あります。(20)

上記 (4) の「数量等」に関する名詞句は、ヒンディー語では kā を必要としない (例: do ādmī 2人の男性、sab ādmī 全ての男性)。また、(5) の「時」に関する名詞句は、ヒンディー語では kā が必要な場合 (例:ravivār ki rāt 日曜日の晩) と必要でない場合 (例:āj rāt 今日の晩) とがあるが、「の」が脱落した発話は全て kā を必要としない表現であった。このことから、「数量等」や「時」に関する語彙を修飾要素とする場合には、L1 転移の影響によって「の」を脱落した可能性もあるのではないかと考えられる。また、数量を表す場合、日本語では「の」を用いる表現 (例:2人の子供がいる) の他、「の」を用いない表現 (例:子供が2人いる) もあることから、「の」が必要な場合と必要でない場合との使い分けが難しかったという可能性も考えられる。

最後に、以下 (6) には「国名等」「数量等」「時」以外の「その他」の語彙を修飾要素とする発話例を記した。これらの例のほとんどはヒンディー語で kā を必要とするものである⁽⁷⁾。発話例の (6a) 「しずおかだいがくのがくせい」は4週目に観察された自己紹介の表現である。自己紹介は日本語の授業でまず学習する項目であり、入学後、何度か自己紹介する機会もあるため、ほぼ暗記していたと思われる。同じく4週目には、(6b) 「*パワーでんき (の) かいしゃいん」や (6c) 「IMC のかいしゃいん」のように、「会社員」という共通の語を用いて所属先を表現しているにも関わらず、「の」を使用したり脱落したりする例が観察されていた。これらの例からは「の」が定着していない様子がうかがえる。また、(6g) (6i) (6k) (6l) (6n) では「*せんせい (の) うち、せんせいのうち」や「*き (の) うえ、きはうえ」のように、一旦「の」を脱落するものの、その直後に「の」「は」などを用いて言い直す例も見られ、試行錯誤しながら「の」を習得している様子がうかがえる。

(6) 「その他」の語彙を修飾要素とする発話例

- a. わたしはインドじんです。しずおかだいがくのがくせいです。(4)
- b. R: Mさんは静岡大学の学生です。じゃ、Sさんは?
M: *パワーでんき (の) かいしゃいんです。(4)
- c. R: ここはIMCですね。じゃこの人は?
M: このひとは IMC の かいしゃいんです。(4)

- d. *せんせい (の) かばんです。(4)
- e. R: これは誰のノートですか?
M: *こ、これは カリナさん (の) ノートです。(4)
- f. *わたしは きんようび まつもと (の) うちへ いきます。(5)
- g. *かれ (の) ホームタウン (が) あります、かれはホームタウンをあります。(7)
- h. *むら (の) ひと、むら (の) ひと (は) いきます、デリーに きました。(8)
- i. *せんせい (の) うち、せんせいのうちで、パーティー。せんせい、いいですね。(9)
- j. *このひとはコンピューターを、かいしゃ、かいしゃ、コンピューター (の) かいしゃではたらきます。(11)
- k. *びょうき (の) ひと びょうきのひと いき きます、きます。(12)
- l. *き き (の) うえに き きは うえにとり は います、います、ひとりの とり。(14)
- m. R: そう、水の近くですね。
M: *みず (の) ちかく、ちかく。(14)
- n. *わたしのせんせい (の) なまえ、せんせいのなまえ、あ、M.N。(16)
- o. *にほんの にほんのカップ さどう (の) カップ (を) みせました。(20)
- p. *プレゼンテーション (の) あと せんせいは みなせんせいは ききました。(21)

これらの「その他」に分類した脱落の発話回数は、4週目が最も多く17回であった。しかし、その後5週目以降は比較的少なかった(0~5回)。これらの発話例からは、L1で「の」に相当する語が必要な名詞句であっても、日本語の「の」を脱落すること、そして、その時期は最初期に最も多いということが確認できたことになる。

4. 2. 2 代用の発話例

次に、代用の助詞を用いた発話例について記す。最も多く観察されたのは「は」「に」であった。まず、(7)は「は」を用いた発話例である。(7d)では発話の途中で「わたしはの」と言い直している様子がわかる。

(7) 代用「は」の発話例

- a. *witch は きました、きました、シンデレラはふくは change。(4)

- b. *いとこ、シンデレラはいとこ。(4)
- c. R : Mさんの家族は?
M : *わたしはかぞくの。(5)
- d. わたしのすいとうです。*わたしはのクリスタルディーゼルのすいとう すいで すいとうです。(5)
- e. R : 〈手編みの帽子〉 誰が作りましたか? Mさんが作りましたか?
M : *No、いいえ、あ、わたしははは。(6)
- f. 〈タージマハルの説明〉 *おくさんはモスクです。(7)

次に、代用「に」の発話例を(8)に記した。「に」を用いた例は全て、存在場所や動作場所など場所に関わる説明をする際に観察されたものであった。また、(8c)では一旦「*みずになかに」と言った後で、「みずのなかに」と言い直している。

(8) 代用「に」の発話例

- a. *こうえんにきのうえにねこねこ(が)います。(7)
- b. R : 〈Mの大学時代の写真を見ながら〉ここ(森)も大学の中ですか?
M : *だいがく、forest、デリーにforestともしデリー デリーにもりです。(9)
- c. 〈プールについての説明〉 *みずになかに、みずのなかに、あ、みずのなかににこどものボールをバレーボールをします。(12)
- d. *はまなこのちかくにおてらでUさんといきました。(14)
- e. *わたしははままつにかいかんで すんでいます。(15)

次に、「を」「と」「で」を用いた例をそれぞれ(9)～(11)に記した。(9e)では一旦「を」と言った後で「の」と言い直し、(10)では一旦「と」と言った後で「の」と言い直している様子がうかがえる。

(9) 代用「を」の発話例

- a. シンデレラのおばさん。おばさん?おばさん?*シンデレラをおばさん?(4)
- b. R : 誰の靴ですか?
M : *シンデレラを、あ、くつです。(4)

- c. M: わたしの lake, lake を勉強しました。Lake、みずうみ quality.
 R: lake water は湖の水。
 M: *みずうみを みず。(9)
- d. R: 本屋はどこにありますか?
 M: *ぎんこう、ちかく、ぎんこうを ちかくです、あります、いま、あります。(10)
- e. R: (インドにある) 日本の会社は自動車の会社だけですね。
 M: *じどうしゃをの かいしゃ (は) ちゅうごく (の会社) じゃないです。(15)

(10) 代用「と」の発話例

- R: アグラはどこにありますか?
 M: アグラは、した。*デリー デリーとした、no、デリーの したに あります。(7)

(11) 代用「で」の発話例

- R: (写真を見ながら) カッコいい。大きいバイクですね。
 M: *ともだちで バイクです。(9)

4. 3 久野 (2009) との比較

本被験者 M の結果を、久野 (2009) の被験者 S の結果と比較する。まず、類似点について述べる。主な類似点は4つある。1つ目は、S の結果と同様、M にも「の」の脱落が早期から観察されたことである。S の場合、4週目に適格な「の」が観察され、それと同時期に脱落も観察された。M の場合も、観察を開始した4週目に適格な「の」と脱落とが同時に観察されていた。

2つ目の類似点は、適格に「の」が使用されるようになってからも、脱落の誤りは無くならず、適格構造と脱落とが混在していたという点である。S の場合、4週目以降16週目まで、断続的ではあるが脱落が観察され、適格構造と混在していた。一方、M の場合、「NP1 + の + NP2」では4～21週目に継続的に適格構造と脱落とが混在していた。また「NP1 + の + NP2 + の + NP3」では5週目に脱落が観察され、その後8週目に適格構造が観察されたものの、脱落は消えず、21週目まで断続的に適格構造と脱落とが混在していた。

3つ目の類似点は、代用の誤りが観察された点である。S には「は」「を」が、M には「は」「を」「に」「と」「で」が観察された。このうち「は」は両者共に早期(4週目)から観察され、発話回数も比較的多い助詞であった。

4つ目の類似点は、「NP1 + の + NP2 + の + NP3」について、その出現時期が「NP1 + の + NP2」よりも遅く、さらに、不適格な表現が多かったという点である。S の場合、「NP1 + の + NP2」が観察され始めたのは4週目であった。これに対し「NP1 + の + NP2 + の + NP3」は11週目から観察され始め、その発話(2回)はいずれも不適格であった。一方、M の場合、「NP1 + の + NP2」が観察され始めたのは4週目であった。これに対し「NP1 + の + NP2 +

の+ NP3」は5週目から観察され始め、その発話回数39回のうち25回が不適格であった。

次に、相違点について述べる。主な相違点は2つある。1つ目は、Mの場合、発話の途中で言い直しをすることが多かった点である。一旦は「の」を脱落したり、あるいは、他の助詞を用いたりするものの、すぐに「の」を用いて言い直す例が多く見られた。

2つ目の相違点は、Sには修飾要素と被修飾要素の順序が逆になった誤りが観察されたが、Mには1度も観察されなかったという点である。「NP2 + の + NP1」という語順はヒンディー語にはない。同じL1を持つ両者にこのような違いが見られた一因としては、Sの場合、英語に頼る傾向が強く、英語の転移の影響があったことが考えられる。Sはデータ収集の際、伝えたい内容を日本語で話すのは難しいため、英語で話したいと主張することが多かった。一方、Mの場合、分からない単語や表現について英語やヒンディー語を使って説明を求めたこともあったが、できるだけ日本語で話そうとする態度がうかがえた。そのような違いが、両者の発話回数の違いにも現われているのではないかと思われる。

5. おわりに

本稿では、ヒンディー語をL1とするインド人女性Mの来日後5ヶ月間（滞在4～21週目）の発話データを基に、名詞句構造に関わる「の」の習得過程について調査した。その結果、主に明らかとなった特徴は(12)のとおりである。

(12) Mの名詞句構造に関わる「の」の習得の特徴

- a. 「の」の脱落が最初期から観察された。「NP1 + の + NP2」での脱落は4週目から、「NP1 + の + NP2 + の + NP3」での脱落は5週目から観察され始め、脱落はその後も21週目まで続いた。脱落にはL1からの転移の影響では説明し難いものも多く見られた。そのような脱落は4週目に最も多く（17回）、その後は比較的少なかった（0～5回）。
- b. 適格構造と脱落とが4週目から21週目まで混在していた。「NP1 + の + NP2」では4週目から、「NP1 + の + NP2 + の + NP3」では8週目から適格構造が観察され始めたが、適格構造出現後も脱落は消失せず、観察され続けた。
- c. 他の助詞「は」「を」「に」「と」「で」による代用の誤りが観察された。このうち、「は」の使用回数は比較的多く（12回）、そのほとんど（11回）が早期（4～7週目）に観察されていたという点で、他の助詞と異なっていた。
- d. 発話の途中で、一旦「の」を脱落したり、他の助詞で代用したりした直後に、「の」を用いて言い直すことが多かった。

これらの特徴のうち、(12a)は習得の最初期から「の」の脱落が観察されたという点で、(12c)は「は」を含む代用の誤りが観察されたという点で先行研究と類似点が見られた。また、(12b)の適格構造と脱落との混在は、白畑（1994）、白畑・久野（2005）、久野（2009）などで同様の報告がある。

Mの場合、白畑・久野（2005）の児童に見られたような、脱落のみが観察される時期は確認できなかった⁽⁸⁾。しかし、MにはL1転移では説明し難い脱落が4週目に高い割合で観

察されていた。この点を考慮すれば、習得の最初期に特に「の」を脱落する傾向があったと考えることも可能だと思われる。

以上のことから、Mに見られた習得過程は、まず「の」を多く脱落する傾向があり、その後「の」を適格に使用していくようになるものの、依然として脱落も見られるという過程であったと考えられる。これは、白畑・久野 (2005) での習得過程、つまり、初めは「の」の出現がなく、その後「の」が出現し始めるが脱落も(「AP + NP」構造の場合は過剰使用も)する、という過程に基本的に沿ったものであろうと思われる。

これまで、ヒンディー語母語話者を被験者とした縦断的調査はほとんど行われていない。そのため、本調査で得られた結果は、今後のL2学習者の名詞句構造や格助詞などの習得過程を解明する上で、何らかの示唆を与えるものと思われる。本稿では21週目までのデータを基に名詞句構造について調査したが、今後、22週目以降のデータも用いて同構造の調査をさらに進めたい。また、今回は調査対象としなかった「AP + NP」構造についても、調査を進めていきたいと考える。

【謝辞】

データ収集にあたり、録音機材や教室の提供等、袴田麻里先生をはじめとする国際交流センターの先生方に大変ご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

【注】

1. 文法的に不適格な表現には「*」を記した。
2. 名詞的素性を持つ場合を [+N]、持たない場合を [-N]、動詞的な素性を持つ場合を [+V]、持たない場合を [-V] とした場合、名詞は [+N, -V]、形容詞は [+N, +V] となり、[-V] 素性を持つ場合に「の」が必要となる(丸田・平田 2001、中村・金子・菊地 2001)。
3. 本稿では紙面の都合上、「AP + NP」構造は調査対象としなかった。また、「NP1 + の + NP2」構造に関して、NP2 が省略されていると思われる表現(例:私の)は分析対象としなかった。
4. ヒンディー語の文字はデーヴァナーガリー文字であるが、本稿では Hardev (1984) を参考にローマ字で記した。
5. 12週目には「みんな」を意図した「みんなのひと」が観察されたが、分析対象外とした。また、形容詞を含んだ名詞句が8週目(例:だいがくの ちいさいセンター)と16週目(例:はままつの いろいろプレイス)に観察されたが、これらは「N1のN2」に含めることとした。
6. 発話例の記載順序は実際の発話順である。
7. 発話例(6)のうち(6k)「病気の人」は k̄a を用いず、形容詞 bimār (病気の) を用いて表現することができる。
8. Mのみならず白畑(1994)や久野(2005)の成人学習者の場合も、脱落のみの時期は観察されていない。これらの結果が偶然なのか、あるいは学習者の年齢やその他の要因によるものなのか等については、今後さらに調査を進め解明すべき点であると思われる。

【参考文献】

- Hardev Bahri (1984) *Learners' Hindi-English Dictionary*. Kashmere Gate, Dehli: Ravindra Printing Press.
- 久野美津子 (2004) 「第二言語としての日本語格助詞の習得過程解明を目指して—ブラジル人幼児の事例における予備的調査—」『静岡大学留学生センター紀要』第3号、15-30
- (2009) 「ヒンディー語母語話者による日本語名詞句構造習得に関する予備的調査—格助詞「の」を中心に—」『静岡大学国際交流センター紀要』第3号、43-59
- 古賀勝郎・高橋明 (2006) 『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店
- 丸田忠雄・平田一郎 (2001) 『語彙範疇 (Ⅱ) 名詞・形容詞・前置詞』研究社
- 松田由美子・斎藤俊一 (1992) 「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』2、129-156
- 中村捷・金子義明・菊地明 (2001) 『生成文法の新展開』研究社
- 迫田久美子 (1990) 「話しことばの誤用分析研究—助詞を中心として—」『教育学研究紀要』36巻、中国四国教育学会、116-121
- 白畑知彦 (1994) 「成人第2言語学習者の日本語の連体修飾構造獲得過程における誤りの分類」『静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇)』第44号、175-190
- 白畑知彦・久野美津子 (2005) 「L2 児童による日本語名詞句構造内での『ノ』の習得」*Second Language Vol.4*, 日本第二言語習得学会 (J-SLA)、29-50

The Acquisition Process of *no* in Japanese Noun Phrases by Another Hindi Speaker: The Case Study for the First Fifth Months

HISANO, Mitsuko

This paper is a case study of the acquisition process of *no* in Japanese noun phrase structure ([NP1+*no*+NP2]). The subject is a Hindi speaking lady. Samples of spontaneous speech were collected longitudinally for 5 months (starting from the 4th week after her arrival to Japan).

The results are as follows: (a) The ungrammatical structure without *no* appeared from the 4th week, and it continued until the 22nd week. Especially in the 4th week, she often omitted *no*, and many of the errors were difficult to attribute to L1 transfer. (b) She began to produce *no* correctly from the 4th week, but even after her producing *no*, errors where *no* was omitted did not disappear. (c) She used other particles instead of *no*, such as *wa*, *o*, *ni*, *to*, and *de*. In particular, she often used *wa* for the first few weeks. (d) She could often correct by herself immediately after producing ungrammatical structures.

The features of (a), (b) and (c) are similar to those found in previous research. Judging from these results, there seems to be basically a similar process for L2 learners to acquire *no* in Japanese noun phrases.